

新潟市潟環境研究所 第7回月例会議（概要）

日時：平成26年11月19日（水）午後3時～午後5時

場所：新潟市役所第1分館101会議室

■会議概要

1 開会

2 報告及び情報提供

「水と土の芸術祭2015」市民プロジェクト募集について（水と土の文化推進課）

視察報告（潟環境研究所事務局）

(1)「滋賀県近江八幡市西の湖水郷めぐりから見た水を巡る生活」 林 絢子 研究員

【水郷めぐり・舟】

- ・近江八幡市にある西の湖周辺の水郷地帯では、水郷めぐりとして4社が観光船（手漕ぎ船、エンジン船）を営業している。コースの一部は干拓によって埋め立てられてできた水路もある。手漕ぎ船に乗船したが、向かい風で舟が流され、船頭が「風が一番の問題だ」と言っていたことが体感できた。
- ・この手漕ぎ船は、田んぼを行き来した田舟だが、嫁入り道具でもあった。昭和30年代までは嫁入りするのに3艘ほど仕立て、前の舟に仲人と嫁、後ろの舟に箆篙と長持を積んで水路を通った。花嫁が通った水路は、現在でも「嫁入り水路」と呼ばれている。
- ・琵琶湖の田舟はマキという木で造られており、ヘサキ（前）とトモ（後ろ）が反っているのが特徴で、舟の操船は、檣の木製の櫓を水の中で8の字に動かし、櫓を見ないで前を見ながら漕ぐのがコツとのこと。かつては女性も舟を漕いでいた。

【ヨシについて】

- ・近江八幡市のヨシ屋は、昔15軒あったが、現在1軒のみである。ヨシは、飛騨高山市の合掌造りの屋根や、ついたてなどの高級家具の素材、ノートの繊維として使われている。ヨシ簾（ズ）も作られているが、中国製の廉価品に押されているのが現状である。
- ・水路に生えているヨシやマコモは皆の共有財産であり、無断で刈るのは禁止されている。日にちを決めて皆で一斉に刈る。ヨシ焼きは現在でも行われており、観光船が休業期間中の3月に行う。

【漁について】

- ・琵琶湖や内湖での漁は、陸から投網や釣りをするのは自由だが、舟から魚を捕るのは漁業権が必要。
- ・「タツベ」と呼ぶ円柱形の竹カゴに返しが付いた漁具があり、餌を入れることはしなくても魚が勝手にタツベの中に入っていく。夜にヨシ原周辺にタツベを仕掛け、1～2日後に引き揚げるとのこと。
- ・タツベ漁は舟からタツベを回収するので、漁業権が無い限り一般の人は仕掛けることができない。

(2)「福井県勝山市におけるエコミュージアムをもとにしたまちづくりについて」丸山紗知 研究員

【エコミュージアムとは】

- ・日本エコミュージアム研究会の「エコミュージアム憲章2009」によると、エコミュージアムは、地域社会の内発的・持続的な発展に寄与することを目的に、一定の地域において、住民の参加により環境と人間との関わりを探る活動としくみである。
- ・エコミュージアムは地域の中にいくつかの限られた美しい景観や自然、大事な文化財や記念物があるというのではなく、地域の中にあるすべての素材に価値があり、それらが一体となってはじめて地域は地域となると考えるものである。また、エコミュージアムは一定領域（テリトリー）内で地域の記憶の井戸を掘り、掘り出された記憶（遺産）を地域全体の中で保存・展示・活用していく博物館づくりである。（吉兼 2000）

【勝山市エコミュージアムについて】

- ・近年、エコミュージアムをまちづくりの手法として取り入れ、市民参加でエコミュージアム構想を具体化し、地域の活力の再生を目指す自治体が増えてきている。
- ・福井県勝山市もその一つで、平成 12 年度から現在まで、エコミュージアムによるまちづくりを推進している。
- ・勝山市のエコミュージアムの基本理念は、「① 遺産の発掘と保存活用」「② 地域への愛着と誇り」「③ 新しい価値観による魅力発見」「④ 活気ある元気なまちづくりと地域経済の発展」の 4 つを挙げ、いつまでも住み続けたいまちの実現を目指している。
- ・地元住民にとって地域文化は身近すぎる、当たり前存在であり、その魅力に気がつかないことが多い。しかし、地域の文化をもう一度見つめなおし、地域のかげがえのない遺産を再発見することで、より多くの住民が、地元を誇りを持つようになり、住民一人一人が意識して地域の遺産を保全するようになった。これは、エコミュージアムを立ち上げたことによる一つの成果といえる。

3 講義

「潟のほとりから」佐藤安男 外部相談員（水の駅「ビュー福島潟」事務局長）

【コハクチョウ越冬数日本一の新潟市、潟と田】

- ・新潟県は近年 15,000 羽を超えるハクチョウが越冬する日本でも屈指の飛来地である。「新潟県水鳥湖沼ネットワーク」の瓢湖・福島潟・阿賀野川・鳥屋野潟・佐潟での長年のハクチョウ、ガン類の生息数同時調査結果から冬季期間中の全体の総数に極端な変動がないことがわかってきた。これはハクチョウが積雪状況により生息地を越後平野内の中で移動していることになる。彼らにとって、田んぼは採食地、潟は安全なねぐら、水田や河川を含めた越後平野全体がハクチョウの「お家」といえる。

【潟とラムサール条約】

- ・ラムサール条約は、「保全・再生」「ワイズユース（賢明な利用）」「交流・学習（CEPA）」の 3 つの柱を基盤としている。特に「ワイズユース」は重きを置かれている。佐潟では地元住民主体で行う「潟普請」、福島潟では市民 2 万人参加の「自然文化祭」などを行うなど、保全活動だけでなく、湿地の恵みを賢く使うワイズユース活動を継続している。さらに地域住民が関与・共存する湿地管理を推進していくことが必要不可欠である。

【新潟の潟、越後平野の価値や恵みとその持続的利用、循環】

- ・生物多様性とは、生きものたちの豊かな個性とつながりのことである。生物多様性の恵みを得ているのは地域の人や生物だけではなく、企業や団体も、その恩恵を受けている。CSR（企業の社会的責任）活動の一つとして、企業も潟の生物多様性保全に協力してほしい。
- ・ワイズユースの一つに観光がある。観光は「光を観る」と書く。身近な資源も、それを磨いていき、光輝かせたものは、魅力的な地元の財産、「光」になりうる。ワイズユースが交流人口の増加や地域振興につながることを望む。
- ・潟の保全やワイズユースを進めるときに、3 つの視点を意識している。1 つ目は俯瞰するマクロな視点である「鳥の目」。2 つ目は心を含めた人間の目線でみる「人の目」。3 つ目は調査・研究を含むミクロな視点「虫の目」。
- ・ワイズユースとは持続可能な利用と言い換えられる。保全やワイズユースに汗をかくだけでなく、そこにお金が循環する持続可能な形を意識したい。例えば補助金等利用の一過性イベントではなく、持続できる活動推進につながる活動が望ましい。お金と人の力がうまくからみあい循環する活動を目指したい。潟自体や潟での活動が、お金の価値に換算できるといいのだが。
- ・潟は新潟市のなかでは非常に大きい自然財産である。地域住民、市民、行政だけでなく、生物多様性の恵みを楽しんで生産、経済活動する企業の関わりを発掘できないか。また、関わる主体がそれぞれしっかり役割分担を考え連携することで、独自の循環システムを描きたい。新潟の財産「潟」を子どもたちに残したい。
- ・水の駅「ビュー福島潟」を管理運営する「福島潟みらい連合」としても頑張りたい。